

博士論文（要約）

論文題目 宋代学校研究——地域社会における儀礼・祭祀空間としての視点から——

氏名 梅村 尚樹

宋代学校研究

——地域社会における儀礼・祭祀空間としての視点から——

目次

序章

一、宋代教育史という視座	1
二、唐宋変革論と欧米の士大夫研究	7
三、欧米士大夫研究からの影響とその意義	17
四、本論文の視角	20

第一章 北宋前半期における廟学

一、宋初における地方学校の概況	27
二、巡幸と曲阜の廟学	31
三、慶暦の興学とそれに至る学田賜給	34
四、「廟」から「学」へ	38
五、「学宮」観念の確立	43
小結	45
表	47

第二章 地方官学の興起とその象徴

——文翁・常袞の顕彰を手掛かりに——

一、『漢書』循吏列伝における文翁	50
二、宋代における文翁言説の端緒	51
三、文翁伝説の盛行と成都府学	53
1 成都府学における慶暦の興学	53
2 文翁言説の継承と成都府学 一呂陶の場合	56
3 文翁言説の継承と成都府学 一胡宗愈の場合	59
4 「石室先生」文同	60
5 南宋、成都府学における文翁言説 一成都府学官、李石を例に	62
四、文翁伝説への対抗 一主に福建の常袞伝説を例に一	64
1 蘇州学に見られる興学の象徴	64
2 福建興学の象徴、常袞	65

3	常袞の興学とその実態	65
4	福州府学における常袞	68
五、	「郷賢」としての文翁 —南宋における文翁言説の一側面—	69
	小結	71
第三章 地方官の着任儀礼		
	——官学との関わりを中心に——	73
一、	北宋中期頃までの概況	75
二、	祝文の分析 北宋時期	77
1	謁廟祝文とその分析方法	77
2	北宋中期頃までの謁廟祝文	78
3	熙寧以降北宋末まで —主に曾鞏と蘇軾の例から—	80
三、	祝文の分析 南宋時期	82
1	南宋初期の制度化とその背景	82
2	南宋期祝文の全体的傾向	84
3	朱熹の場合	84
4	孫応時の場合	86
5	南宋中期以降の特色とその後の展望	86
四、	謁廟儀礼と管理体制	87
	小結	89
	表	91
第四章 先賢祭祀の理論		
一、	北宋末の学校観と「瞽宗に祭る」	97
二、	「凡釋奠者必有合也」の解釈	100
三、	南宋期における「必有合」の展開	103
四、	魏了翁による通祀批判	106
五、	郷先生概念について	112
	小結	115
第五章 先賢祭祀と祖先祭祀		
	——南宋後期における学校と先賢祠——	116
一、	先賢祠と祖先祭祀 —主に魏了翁の思想から—	117
1	楊文安公祠堂記	117

2 殷少師祠堂記	119
3 常熟県重建学記	121
二、学外から学内へ 一福建の艾軒祠を中心に	123
三、学校内先賢祠の多様化 一仏寺との対抗関係	127
小結	133
結論	135
一、儀礼・祭祀空間としての学校	135
二、地域コミュニティとしての場	136
三、地域伝統の創造とその継承	138
四、士大夫論との関わりにおいて	140
参考文献一覧	144

宋代学校研究
——地域社会における儀礼・祭祀空間としての視点から——
(内容の要約)

梅村尚樹

序論

本論文は中国宋代の学校、とりわけ地方における官学を扱うものである。前近代中国における学校の歴史を振り返れば、宋代は地方学校が急速に普及した時期に相当する。地方学校は大きく分けて官学と私立学校である書院とに分類されるが、宋代を通じて見ればそのどちらもが大いに発展を遂げ、清代までの教育体制においてその基礎を成したのは疑いない。特に北宋仁宗朝の慶暦年間、神宗朝の熙寧・元豊年間、徽宗朝の崇寧年間頃には政策的に地方官学の普及が進められ、この過程で科挙との結びつきを強め、官僚選抜の主要な部分に関わる重要なものとなっていった。南宋に入ってから地方官学の政策的振興は続いたが、仕官ルートとしての直接の位置づけが失われ、選挙制度上の存在意義は北宋後半期に比して縮小した。しかし科挙受験層の拡大は教育の需要拡大に直結しており、地方官学は数量的にも増加傾向を続けていく中、南宋中期には道学者を中心として科挙受験に専心する学習のあり方を批判し、その理念のもと官学と一線を画する書院が多く作られるようになっていく。中でも朱熹は書院を拠点に著作活動に取り組んで朱子学を大成し、各地に展開した書院を拠点として朱子学は普及していったのである。

このような事情を背景として、従来の宋代学校研究は主に教育史か科挙史の文脈の中で語られてきた。さらに言えば教育史の中における宋代の位置づけは、教育が普及して朱子学を始めとする新たな学問が生み出された時期であり、その意味から朱子学の興った書院が重視され、官学は科挙に隷属した存在として否定的に理解される傾向が強い。一方、科挙史の文脈からは、社会流動性の議論を念頭に置き、官学普及による教育機会の増加が意識されるが、必然的に科挙との結びつきを強調してそれを普及の前提として論じられることが多かった。しかし前述のように、南宋期には相対的に科挙との結びつきが弱くなるにもかかわらず、依然として官学は普及を続け、数量的には北宋以上に多くなり、より人々に浸透していったのである。このことは、従来の教育史および科挙史の文脈から宋代の地方学校と、その広範な普及を理解することの限界も示しており、それ以外の視点からも分析を進める必要がある。

そこでまず想起されなければならないのが、なぜ宋代において学校がこれほどまで重視されたかという問題である。例えば教育は強力な統制力を持たせることが可能であるが、統一的な科挙制度においてもその役割は一定程度果たすことができ、実際に科挙試験で問われる内容もその目的に適うよう改革が加えられた。これに比べれば、学校を多く作り教

育によって能力を身につけさせるのは遥かにコストがかかるにもかかわらず、なぜ彼らはそのような方法を選択したのであろうか。この問いを考える鍵となるのは、前近代中国における学校は、現代社会から想像されるような単なる教育機関ではなかったという点である。北宋中期頃の改革案は士人層の理想と新たな価値観を多く含んでおり、その中での学校は彼らが理想とする周代の社会に近づけるために欠かせない重要な要素だった。そもそも「学校」という語は経書に典拠を持ち、その呼称自体が儒教に関わる施設を指すと理解すべきだし、また唐代には原則として学校と孔子廟が並置されるようになるから、廟と学校との極めて境界の曖昧な分かれ難い関係が構築されていく。このような「廟学制度」は唐代以後、清代に至るまで一貫して存在し、さらに東アジア全般で広く定着していくが、そうであれば宋代の急速な地方学校普及の段階において、孔子廟を内包する礼教施設としての面がどのような意味を持ち、どのような変化を伴っていたのかという点が問題になってくる。これは宋代という時代を理解するとともに、中国前近代における学校を多角的に理解するために欠かせない視点でありながら、従来ほとんど顧みられてこなかった。

このような観点から宋代の学校を見直すと、時代とともに徐々に多様な対象を祀る空間へと変化していくことに気づかされる。そこで本論文では学校内で行われる儀礼や祭祀に特に注目し、中でも学校が多様な対象を祀る空間へと変容していくその過程を描き、そこから見えてくる学校の地域社会における位置づけ、および士人社会において学校の担った役割について考察していく。具体的には第一章でまず学校普及の画期となる慶暦年間以前（北宋前半期）に焦点を当て、宋王朝の地方教化策が孔子廟の普及から始められ、それが徐々に学校を内包するものへと切り替えられ、さらに概念上も孔子「廟」よりも「学」が重視されていく様子を描く。この時期までの地方学校は孔子廟との区別が曖昧で、中央の国学をモデルに作っているため、学校内に孔子とその弟子たちが祀られるに過ぎなかった。つまり設備のみならず儀礼、祭祀の面で、中央と地方で相似する体系の構築が目指されたのである。

学校内の祭祀対象に注目したとき、宋代を通じて最も顕著で重要な変化は、時代が下るとともに地域と関わりの深い対象が多く祀られるようになっていく点である。そこで第二章から第五章を通じて、このような画一的に作られた地方学校が、地方独自の要素を内包していく様相と、そのような傾向を生み出した士人層の意識の変化を描いていく。これら分析は多分に言説史、思想史としての要素を含むが、それによって宋代を通じて進行する士人層の地域意識の先鋭化という問題についても論じていく。

第一章 北宋前半期における廟学

まず第一章では北宋前半期、主に四代仁宗朝の頃までに焦点を絞って孔子廟と学校の関係を整理した。北宋期の学校改革において注目すべきなのは、四代仁宗朝の慶暦年間

(1041-48)、六代神宗朝の熙寧年間(1068-77)、そして八代徽宗朝の崇寧から政和年間頃(1102-18)であり、特に慶曆四(1044)年に全ての州に学校を設置するよう詔が出されて以降、北宋未まで学校政策は科挙と関連しながら制度改革を続けていくことから、従来の研究ではこの時期以降を本格的な検討対象としているものがほとんどである。確かに慶曆四年の詔は学校の位置づけを大きく変えた重要な画期ではあったが、しかし学校普及を孔子廟との関連から捉えようとするならば、それは決して突然訪れた画期ではなく、徐々に進行していた「廟」から「学」へという流れの中に位置づけることができる。その際に重要になるのが、三代真宗朝の時期であるが、史料面での困難もあって従来ほとんど注目されてこなかったと言っていい。もとより体系的に利用可能な史料は限られるが、文集や地方志などから孔子廟と学に関する記述を収集することで、ある程度これを復元することができる。そこで北宋中期頃までの時期に書かれた、孔子廟および学校を作ったり改修したりした際に書かれた「孔子廟記」、「学記」を全て抜き出したところ、それら事業には、集中して行われた時期とそうでない時期、すなわち時期的な偏りがあることが見て取れる。おおまかには(1)太宗朝の時期以前(雍熙年間まで)、(2)真宗朝の時期(咸平年間から大中祥符年間半ばまで)、(3)仁宗朝の時期(景祐年間以降)と三つの時期に区分することができ、ここから中央の動向と実際の地方学校政策を概観して、当時の士大夫が「廟」と「学」をどのように捉えていたのか、積奠に関わる觀念上の変化を示すことで、孔子廟と学校の間で難しい関係について論じていく。

宋初の国学は五代後周の国子監をそのまま継承することから始められたが、建隆三(962)年に初めて講学が行われたのよりも前に、宋太祖は受禅直後、建隆二年、三年に国子監に行幸して孔子に拝謁している。地方については、唐五代の戦乱を経て地方学校は途絶していると認識されていたようで、三代真宗が即位した直後の孫何による上言などにそれが示されている。しかし真宗は即位当初、儒教に基づく統治を推進する方針も示しており、孔子の子孫を探して文宣公の封号を与えるとともに曲阜県の県令に任命したほか、景德三(1006)年には、全国の州は孔子廟を改修してその中に講堂を設けて、生徒を集めることが命じた詔を發した。

大中祥符元(1008)年から真宗は封禅のため行幸を行うが、その途上曲阜に立ち寄った際、県令の孔勗の奏請によって曲阜孔子廟内に学舎を作って講説することが許可された。その後しばらく真宗は道教への接近を強めたため、儒教振興には積極的でなくなり、地方の孔子廟および学校に関する事業はあまり見られなくなるが、天禧五(1021)年に知兗州となった孫奭は兗州の孔子廟内に学舎を作って講学を行い、数百人におよぶ学生が集ったという。そして仁宗が即位した後、孫奭は兗州の学校のために学田を賜給して欲しいと願い出て許可されたが、これが前例となって仁宗朝では地方官学の設置とそれに伴う学田賜給が盛んに行われるようになり、慶曆の興学へとつながっていくのである。

以上のように当初宋王朝の強化政策は孔子廟の普及から始まり、それを学校へと切り替えていく段階を経て、学校普及へとつなげられていった。この過程においては廟と学の区別は必ずしも明確ではなく、実態として連続的に移行していったと考えられるが、それでは当時の士大夫たちはこの変化をどのように認識していたのかという点に関して、廟学において最も重要な儀礼である積奠を手がかりに北宋前半期の変化を読み解いた。地方において孔子廟と学校が併設されるのは唐太宗の貞観四（630）年の詔まで遡るが、唐代における地方学校普及の程度は史料上の限界もあり、宋代ほど明確にはわからない。逆に宋代からの視点に立てば、唐後半期から続く政治的混乱により地方学校は廃れてしまったというのが共通認識であり、事実宋初は地方には孔子廟だけがあり学がなかったと考えられる。雍熙三（986）年に田錫は「廟が立っていなければ積奠を行う場所がない」と述べ、積奠を孔子廟で行う儀礼と解釈しているが、これは唐後半から五代にかけての観念をそのまま継承したものであった。ところが景德三年の詔には、天下の州県はみな孔子廟を作り、しかもその廟の中には講堂を作って生徒を集め、人師たるべきものがこれを教化することが述べられており、これを受けて章徳一は、廟で積奠を行うだけの唐制とは異なり、廟中に講堂を建てて講義するのは唐制を発展させた宋朝の新たな制だと認識した。さらに廟と学を区別し、廟よりもむしろ学に重点を置く考え方に変化したのが仁宗朝以降の特徴で、歐陽脩と王安石に明確に示されている。特に積奠とは孔子廟を祀る儀礼なのではなく、学校で行う儀礼であると解釈を転換したことが重要で、学を伴わない廟や、学生の参加しない積奠を強く批判するようになるのである。また慶暦年間以降、学校の建設が増え普及が進むと、廟と学は一体となって存在することが当然とされて「廟学制度」が確立され、同時にこのような廟学のことを「学宮」と呼びならわすようになったのである。

第二章 地方官学の興起とその象徴——文翁・常袞の顕彰を手掛かりに——

北宋前半期を中心に孔子廟から学へと徐々に転換していく様子を述べたが、これは国学たる国子監と同じ形式のものを地方にまで広く普及させる意図を含むものであり、その後も孔子とその弟子たちを祀る空間として機能し続けることになる。全国にある学で一律に同じ対象を祀るとするのは、学を通して中央と地方とで儀礼、祭祀における相似的な関係を構築するというにつながり、少なくとも当初王朝が全国に教化を広めるための方策として想定していたのは、そのような廟であり、学であったと想定できる。

このような役割は宋代を通じて失われることはなかった。しかし一方で、学校が各地の実情に合わせて変化を続けていったのも事実であり、このような画一的な存在を志向して作られた学が、いかにして地域独自の文化、伝統を包含する存在へと変容していったのかという問題が第二章以降で論じられる主要な問題となる。

第二章では慶暦から南宋初期頃までを主な対象とし、漢代の文翁という人物に焦点を当てて論じた。慶暦時期以降、学校の普及は教育の普及に直結し、科挙制度の整備と並行する形で整備、拡充が進んでいくが、一方で慶暦の興学は理念的な転換を伴って急激に進められたもので、当初は科挙制度との直接の結びつきがなく、政策開始からすぐに地域社会に受け入れられたとは言えない面もある。そこで地方官学が地域社会に受容され定着していく過渡期に注目し、学校に対する地域士人層の意識の変化を追うことで、その過程においてどのようなことが起こっていたのか、明らかにしていく必要がある。

文翁は『漢書』循吏列伝に現れ、成都に地方学校を初めて作った地方官とされたことから、宋代において興学の機運が高まると俄かに注目を集め、しばしば言及されるようになる。これによって文翁が成都でどのように扱われたのか、また成都府学にどのような影響を与えたのか、あるいは他地域がどのような反応を示したのかを分析することで、当時の地方学校が受容されていく過程で起きた事例として具体的に論じていく。

宋代における文翁への言及の端緒として代表的なものを挙げれば、天聖五（1027）年頃の夏竦のものや景祐四（1037）年頃の張方平のものがあるが、その特徴としては地方学校を興起した最古の事例という観点からのものであり、特に地域性を読み込んだものではなかった。慶暦四（1044）年、知成都府を務めていた蔣堂は、成都に残されていた文翁の石室を拡大する形で成都府学を修建したが、この石室とは漢代に文翁が作った学舎に由来するものであった。ところが蔣堂は同年、地元の人々の反感を買って転任させられ、成都府学も一時官舎へと転用されてしまう。その後、嘉祐二（1056）年に知成都府となった宋祁は荒れ果てていた文翁祠を訪れてこれを改修し、文翁とその興学によって輩出された名賢に蔣堂を加えた十人を祀り、「府学文翁画像十贊」を書いた。そして治平元（1064）年には知府の韓絳によって成都府学は増修されるが、この時には成都府学は漢代の文翁より続く優れた伝統を持った学校として、地域士人にも認識されるようになったのである。

また蔣堂の興学事業では呂陶や常珙といった人物が輩出されたが、特に呂陶は成都府学で蔣堂に見出されたことをきっかけとして進士に登第し、蜀の通判として成都に戻った際には成都府学を称揚する文章を複数書いている。中でも呂陶は成都府学を「石室」と称しており、文翁から続く成都府学の伝統の末端に自らを位置づけたのである。

ほかに文翁の子孫を自称する文同という人物が慶暦四年頃に現れる。文同の父までは無官であったが、父は幼い頃から文同に学問を行わせ、それが知成都府であった文彦博に認められ、成都府学で高く評価されたという。その後皇祐元（1049）年に進士に登第した後は地方官を歴任したが、特に画の才能を蘇軾によって評価されて有名になり、「石室先生」と称された。このように「石室」の呼称は、蜀地域において成都府学の愛称として広く知られたようで、文翁の伝統とともに地域士人層に深く浸透していったのである。

南宋初期には成都府学官を務めた李石という人物がおり、成都府学に関わる「府学十詠」という詩の連作が残るが、その中に「左右生題名」があり、これは文翁が学生の名前を左

右に分けて刻んだという故事を詠んだものである。実際に紹興三十（1160）年頃には学生たちが李石に小録と呼ばれる学生名簿を作ることを願い出て、文翁の故事に倣ってこれを刻んだという。ほかにも李石『方舟集』には学生との濃い人間関係を示す記述が多く見られる。

成都府学を舞台に展開された文翁言説は他の地域でどのような反応を起こしたのだろうか。北宋末頃から、特に福建では文翁に対抗して唐代の常袞を興学の象徴として認識し、文翁と並列させて論じられるようになっていく。福州における興学の実態は大暦八（773）年に宗室に連なる李椅が福州都督となって赴任し、孔子廟を改修したことに始まる。その後に着任した常袞は欧陽詹を推薦し、この地域で初めての科挙合格者を輩出したことから韓愈によって高く評価されることになる。このような経緯もあって常袞は福州における興学の祖と位置づけられることになり、福州府学の中に祀られたが、後に南宋の紹興九（1139）年には府学の先賢堂において常袞が中央に置かれ、欧陽詹を始めとする福建地域出身の諸公が左右に配されたのである。文翁と常袞はこの後も地方興学の代表的な典故としてしばしば並列して語られるようになっていくが、南宋中期以降には文翁はその出身地である廬江でも祀られるようになり、廬江の先賢としても意識されるようになっていく。

以上のように北宋中期から南宋中期頃にかけて、地方の学校内で地域に関わる先賢が祀られるようになっていく。文翁の例は早い時期の代表的な事例に当たり、北宋中期頃には未だ地域性を帯びて語られていなかったが、地方学校が地域に定着し浸透していくに伴って、文翁に関わる言説も地域固有の伝統として定着し、再生産されていったのである。

第三章 地方官の着任儀礼——官学との関わりを中心に——

第三章では宋代地方官の着任儀礼に焦点を当て、宋代全体の様相を明らかにした。前近代中国においては地方官が着任した際に、地元の有力な神々に拝謁する慣習がある。この着任儀礼に関しては唐代を対象とした雷聞の研究や、南宋中期の真徳秀を対象にした小島毅の研究がすでにあるが、唐代と南宋中期では史料上に現れる頻度や、祭祀の対象など、両者の間にはかなりの隔たりがあり、着任儀礼は宋代に大きな変化をとげたと考えられる。注目されるのは、唐代の着任儀礼では孔子廟や社稷といった、地方官祭祀において重視されるはずの存在に対しては行われなかったが、宋代に最も重視されたのは孔子であり、また場所としては孔子廟を内包する学校だったことである。特に南宋初期の紹興十四（1144）年には、地方官が着任したらまず学宮へ行き孔子に拝謁することが初めて法令に明記された。これは地方官が着任時にまず学校に行くことを意味するが、それにはどのような意味があり、それが学校やその中に祀られる先賢祠にいかなる影響を与えたのか、それを明らかにする必要がある。そこでまず宋代における着任儀礼の全体像を明らかにし、その上で孔子廟および先賢祠を含む学校がどのような位置を占めていたのかを示していく。

具体的には地方官が着任儀礼を行った際に書き残した祝文を網羅的に収集し、それを分析対象とした。宋代の個人文集の中には多くの祝文が残されているが、明代以降になると着任儀礼が定式化し、祝文の字句内容も定型が決められたため、文集中にほとんど残されなくなってしまう。すなわち宋代は着任儀礼が広まり定着するまでの過渡期に当たるために、その変化を分析することが可能なのである。

まず北宋中期頃までの概況を述べれば、地方官が着任時に当地の有力な祠廟に赴いた例は史料上散見されるものの、残されている祝文は見られない。天聖五（1027）年に絳州翼城県の県令となった文彦博は当時の状況について、「故事では、地方長官が着任した初めには、その州や県の祠廟全てに赴くという。…ゆえに県の吏に尋ね、県図で調べたところ、祀典に記載があり祭祀を行うべきものは宣聖の祠だけであった」と書き残している。ここからは祀典に記載されている祠廟には着任儀礼を行う慣習があったことが窺え、特に孔子に拝謁していることになるが、当時の各地の祀典は未整備だった場合も多かったと考えられ、この慣習がどの程度定着していたかは疑問が残る上、孔子廟がこれら着任儀礼の中でどの程度の比重を占めていたのかも不明である。そこで祝文を網羅的に収集し、着任儀礼の対象を時期ごとに分析した。

その結果、以下のことが明らかになった。宋代に初めて登場する着任儀礼の祝文は慶曆三（1043）年のもので、対象は「諸廟」とするから様々な神々を一括して一つの祝文を書いたことになる。仁宗朝に書かれた着任時の祝文は「諸廟」を対象とするものが多く、孔子廟を対象とするものがほとんど見られないが、神宗朝になると「孔子」と「諸廟」に対する祝文を対にして残す例が多く見られるようになる。ここからは北宋の後半期から北宋末にかけて孔子廟への着任儀礼が徐々に浸透していったこと、孔子廟を他の諸廟に比して上位に位置づけるようになっていったことが窺える。南宋初期には前述のように学校に行き孔子に拝謁するのが法令化されるが、さらに南宋中期以降には各地域における先賢が着任儀礼の対象となっていく傾向が現れる。特に朱熹は着任時に積極的に地元の先賢を発掘し、それらを祭祀の対象に加えていった。もはや南宋後半期の着任儀礼は、「孔子」と「諸廟」のみという単純な構成で祝文が書かれるのではなく、多様な先賢や社稷、城隍廟、山川の神々というように対象が多岐にわたるようになるのである。

これらに加えて着任儀礼には、それを通じて当該施設の維持管理を地方官に委ねるという目的もあった。学校の場合には孔子廟への拝謁を通じて地方官がその改修を決断した事例は多く見られるし、社稷壇の場合にも地方官着任時に壇がきちんと制度のようになっているかを確認し、必要に応じて改修するよう法令で定めた形跡が見受けられる。実際には南宋期の社稷壇は荒廃していたとする記述が目立つが、原則上は学校と同様に地方官が維持管理に留意すべきとされていたのである。

以上によって宋の後半期から南宋初期にかけて孔子廟が他の祠廟より卓越した存在として着任儀礼が定着化、制度化されていく様子を明らかにしたが、これは地方官学の全国的な

普及、定着と軌を一にしており、事実上地方官は着任時にまず学校に行くようになっていったのである。孔子廟と官学の全国的な展開は北宋中期以降、政策的に推進されていったものであり、南宋初めの着任時の規定も、基本的にはこの時期の一連の政策と関連している。各地域の慣習に多く依っていた着任儀礼の中に、徐々に孔子や社稷という画一的なものが組み込まれていき、さらには地方官にその維持管理の役割をも期待するようになっていったのである。地方官は着任の初めに、職務に忠実であることを学校で孔子に誓うのであるから、儒教に基づく統一の価値観を各地域にまで押し広め、それを地方統治の基礎に据えようとした王朝の意図が読み取れる。しかしこれとはまた別の側面として、南宋中期以降には先賢を始めとする各地域固有の対象も増えていき、画一的な存在であったはずの官学は地域的色彩を内包するようになる。その大きな転換点に当たるのが南宋中期頃に興った朱子学であり、南宋後半期には朱子学の浸透とともに学校内の先賢祠は急激に増加していくことになる。

第四章 先賢祭祀の理論

学校の中に先賢が祀られるようになっていく流れを具体的に示してきたが、それではなぜ宋代になって学校の中に先賢が祀られるようになったのか、という問題について考える必要がある。これは先賢祠が多様な対象を含むようになる過程を知る上でも、学校が先賢を祀る場へ変化した意味を知る上でも極めて重要な問題である。そもそも先賢を祀るということを考えた時に、実際に祀られるのがどのような人物なのか、あるいは祀られるにふさわしい条件は何かという点はしばしば問題にされるが、このこと自体を問題と認識し、祀る側が積極的に議論し始めたのが宋代という時代であった。特に南宋中期、朱子学の普及以降にはその傾向が顕著になり、なぜその先賢が祀られるべきなのか、なぜ学校に祀るべきなのかということが厳しく問われるようになってくる

ただしこの点を正しく理解するためには、北宋期から続く議論を踏まえておく必要がある。特に積奠との関わりは重要で、学校は北宋中期に復古思想への転換を契機として、孔子廟をもとにして普及していったことを思い起こさねばならない。孔子廟は元来積奠を始めとして孔子に対する儀礼を行う場であって、さらに言えばその儀礼そのものが儒教的教化の主要な内容だった。ところが積奠は宋代になって改めて学校との強い関連を意識されるようになるが、経書に現れる元来の積奠は必ずしも孔子のみを祀る儀礼を指すのではなく、一般に学校における先聖、先師を祀る儀礼だったのである。先賢祭祀はこのような文脈の中で積奠と関連づけられて理解され、学校儀礼として取り込まれていくが、第四章では先賢祭祀や学校そのものについて、当時の人々がどのように理解しようとしたのかを検討する。特に経学、礼学上の議論を重視して論を進めるが、それは学校を重視する観念が

北宋期の新たな経学の流れと不可分なものであり、当時の士大夫と同様、経書に基づいて考えることが欠かせないからである。

これらを理解するために、まず北宋期における王安石学派の思想から振り返る必要がある。積奠および先賢祭祀の内容は『礼記』文王世子に見える「凡そ学、春官其の先師に積奠し、秋冬も亦之の如し」と「凡そ始めて立学する者、必ず先聖先師に積奠し、行事に及びては必ず幣を以てす」によって規定され、また『周礼』大司楽の「瞽宗に祭る」もこれと関連づけて理解される。唐代までの経学における学校観では、礼・楽・詩・書をそれぞれ該当する学で学び、また各学で各専門の先師を祀ることと理解されていた。ところが北宋後半期の王安石と、それに連なる陳祥道や陳陽らは、教の中で最も重要なのは楽であり、詩・書・礼・楽の順に教を積み重ねることで道德の完成を目指す仕組み、それこそが経書に示された周代の学校なのだ、と解釈した。それゆえに教育行政全般を取り仕切るのが楽の専門家たる大司楽なのであって、それを楽人集団の拠る瞽宗に祀るとするのは、道德的に完成された先師を祀ることと同義、としたのである。

また『礼記』文王世子にある「凡そ積奠は、必ず合有るなり、国故有らば則ち否なり」に関しては、主に「合」をどのように解釈するかで対立があり、唐代までの経学では「合」を隣国と合することとし、「国故」をその土地で先聖先師に該当する故人と理解するのが一般的であった。しかし北宋後半期以降の経学では「合」を「合楽」、「国故」を国における凶事や軍事行動の意味とする解釈が生まれ、従来の解釈と併存しながらも主流となっていく。これは礼と楽を表裏一体のものとして捉え、楽を重視する、新たな経学思想から生まれたものであったが、一方で南宋期にはあえて唐代の解釈に立ち返ることによって、積奠において地域固有の先賢を祀る根拠として主張される例が現れてくる。その代表が魏了翁による経学説であった。

魏了翁は四川邛州の出身、慶元五（1199）年の進士で朱子学の継承者として知られ、特に周敦頤に諡号を賜うよう朝廷に働きかけ、道統の確立に大きな功績があった人物である。周敦頤への賜諡は嘉定十三（1220）年に実現するが、この前後から周敦頤・二程・朱熹といった道統に連なる先儒を祀る祠が全国各地に作られるようになっていく。魏了翁自身も周敦頤祠の記文執筆をしばしば依頼されたが、嘉定十七（1224）年以降、各地に広がる周敦頤祠に疑問を抱くようになっていく。魏了翁は『礼記』文王世子の「合」を隣国と合することと解釈し、これを主な根拠としたほか、『後漢書』などの史書も参照して理論を組み立て、周敦頤と関わりのない土地で周敦頤を祀ることを批判するに至った。さらに『易』における「萃渙之義」の重要性を述べ、『春秋』などに見られる歴史を読み解くことで、周代に行われた理想的な祭祀は、子孫によって各地で行われる祖先祭祀であったことを主張した。これに照らせば、全国各地で周敦頤を祀るのは経学的根拠のない、周代の理想に反する祭祀だったのである。魏了翁のこの思索はその門人とされる呉泳とのやり取りの中にも見られるが、呉泳は、古の聖人とそれを信奉する儒者は気脈が通じているのだから、遠

く離れた地で祀ることに問題はないと反駁している。これは魏了翁の立論を十分理解した上での反論とは言い難い面もあり、多様な祭祀が定着していく過程に直面した当時の士大夫が、いかにして正当な根拠を導き出そうとしていたのか、その揺らぎを窺い知ることができる。

また南宋期に唱えられるようになった先賢祭祀の根拠として「郷先生」の概念がある。元来『儀礼』に見られる「郷先生」は、後に郷里で教学に携わった人物のことを指したが、「郷先生歿せば社に祭るべし」という古の故事が再認識されて先賢祭祀の根拠とされるようになる。南宋末期の欧陽守道の例に見られるように、江西吉州において南宋後半期には、欧陽脩を始めとする地元出身の著名な人物を「郷先生」と呼ぶ習慣が定着していたようで、国学で瞽宗に祭ることと、地方学校で郷先生を祭ることを一対のこととして捉えている。この考え方は南宋から元にかけて確認することができ、中央の国学が国全体における道德者を祀るのと同様に、地方学校ではその地方における道德者を祀る一つの根拠とされたのである。

以上をまとめれば、南宋中期以降、学校の中に祀られる対象が急増するという現実を受けて、それをいかに正当化するかが大きな問題とされ、しかも各地方独自の対象と全国で通祀される対象という、方向性の異なる二つの類型に対してそれぞれ対応することが求められた。このような祭祀の根拠を問う議論と思索は、後の「郷賢」や「名宦」といった類別を生むことになった。すなわちそれまでは過去の賢人という広い概念で捉えられていたものが、このような過程を経て概念が細かく分化されたと言える。

第五章 先賢祭祀と祖先祭祀——南宋後期における学校と先賢祠——

第五章では前章を承けて南宋後半期、主に理宗朝における先賢祠について論ずる。ここまでの説明からも明らかなように、南宋後半期は学校が多様な先賢を祀る場へと変容していった重要な時期に当たる。重要な先行研究であるエレン＝ネスカーの研究は、新たな先賢祠の設置が朱子学が官学化された理宗朝に特に多いこと、それら先賢祠が学校と不可分の関係にあって徐々に学校内に取り込まれていったことなどを指摘して、周敦頤以下、二程や朱熹ら「正当な」道統に対する信仰を表現したものと捉えたが、南宋後半期に急速に増えたのは道統の先儒を祀る先賢祠だけではなく、後に名宦や郷賢と呼ばれる多様な対象も同様で、しかも学校内へと移行する傾向にあったのも同じである。そこでこの章では、先賢祠が学校外から学校内へと移動する際の過程と理由に注目することで、当時の士大夫たちにとって先賢を祀ること、また先賢を祀る場としての学校がいかなる意味を持っていたのかを示すことを目的とし、前章で言及できなかった学校外の先賢祠や、理念から離れた実態面をも重視することで、その欠を補うものでもある。その起点として取り上げるのはやはり魏了翁の書いた先賢祠記の事例である。魏了翁『鶴山集』は宋代の文集中、最も多

く先賢祠記を含んでいて、事例研究としてもまず分析されなければならない対象であるし、前章で明らかにしたように先賢祭祀の根拠について厳密な理論の構築を試みた点で特色がある。これを当時の社会的風潮の上に位置づけることもこの章の目的となる。

魏了翁によって紹定六（1233）年か端平元（1234）年に書かれた、潼川府の楊椿祠に関する記文がある。楊椿は再三潼川で官職を務めたが、その孫である楊瑾が知潼川府となった際に楊椿祠を新たに作り、記文の執筆を魏了翁に依頼した。この時、魏了翁はこの依頼を快諾したが、その根拠は子孫である楊瑾がその祖先である楊椿を祀ったということ、さらには孫が祖父と同じ土地で官職に就いたことであり、これらは古の理想に適う最も正しい祭祀のあり方だということである。ここでは過去の地方官をその地の民の要請により祀るといふ、文翁の事例などのいわゆる先賢祭祀を、間違っただけではないが本来の礼とは異なるものと指摘する。地方においても過去の地方官をその子孫が祀ることが、それより価値の高い祭祀だと認識したのである。ほかにも紹定三（1230）年頃、殷の比干を祀った祠の記文を依頼された際には、その土地が比干とはなんの関わりもなく、かつ遠く離れていることを疑問視したが、しかしその土地には比干の子孫が移り住んでいるという事実を知り、やはり理想的な祭祀であると結論している。

次に学と関わる事例を挙げれば、慶元三（1197）年以来、孔子の弟子の一人である言偃を祀っていた常熟県学は、紹定年間に改修が行われ、言偃の祠も新しくされた。その際に、県令は言偃の子孫を訪ね当て、学校内に住まわせて祠の管理を委ねたが、さらに経済的な措置も行うことで、この祭祀を永続させるための手段としたのである。また福建地方において林光朝を祀った事例においても、当初祭祀のために祠田が置かれていたが、後にこれが転売され祭祀が途絶えるという事態に至り、これを問題視した林光朝の子孫と当時の地方官によって、祠が学校内で管理されることとなった。このように先賢祠は経済的な裏づけがなければ廃れてしまう危険が常にあり、それを維持するためにとられた最も有効な手段が、学校内に移して、その子孫に経済的援助を与えとともに管理を委ねることだったのである。

嘉熙二（1238）年頃の衢州では、それまでに衢州に移住してきた一族を含め、地元に住む一族によってその祖先が先賢として多く祀られていた。この時、学問に直接関係のあった一部の先賢は学校内に祀られていたが、多くは学外、しかも仏寺に祀られていたものも少なくなかった。それが嘉熙二年に、ある一族の子孫が祖先を仏寺の先賢祠群に加えてくれるよう知州に要請したところ、知州はそれも含めて学外にあった先賢祠群をまとめて学校内へと移したのである。ここからは、学校が土地の先賢を多く祀る機能を未だ十分に果たしていなかったために、それを行っていた寺に加えてもらえるよう子孫自身が希望したということ、それに対して州はその機能を学に移植したことが読み取れる。そしてこの時を境として、衢州学は多様な対象を祀る空間へと変化したことになる。

魏了翁が示した、祖先祭祀に相当するときに最も理想的な先賢祭祀になるという理論は、緻密な理論構成を持つものであったが、その詳細は別としても、祖先祭祀を特に重視する視点は当時の士大夫の風潮と合致していたと考えられる。先賢として祀られることは、子孫にとっては一つのセーフティネットともなり得たし、また公的保護を受けるに値する有力な一族と認められることでもあった。南宋後期には、学校はそのための場としての公共的機能を獲得したのである。

結論

本論文は宋代の地方学校を中心として、教育史の視点からではなく、儀礼祭祀の空間としてどのような変容を遂げたのか、地域社会との接点を意識しつつ論じたものである。学校普及の前段階は地方における孔子廟の普及から始まったが、それは当初、中央の国学にある孔子廟と相似的な関係にある施設を地方にも設置することから始められた。北宋中期頃の理念的な転換を背景として、孔子廟は学校へと切り替えられていくが、これは孔子廟としての機能、役割を学校の中に取り込む形で進められていったのである。一方で、学校の普及に伴って、孔子とその弟子以外の地域固有の先賢も学校で祀られるようになっていくが、これは学校内に先賢祠が置かれるようになった契機とも言えるもので、北宋末から南宋にかけて学校の普及が一層進むとともに、このような事例も増えていく。とりわけ南宋中期以降、朱子学の興隆とともに各地の学校では普遍的に見られるようになり、その過程において、後に「郷賢」や「名宦」と分類される様々な対象が学校で祀られるようになるが、重要なのは当時すでに「郷賢」や「名宦」と言った概念区分が存在していたわけではなく、祭祀における礼学上の根拠を問い直し、それを明確化させる過程でこれらの定義が確立してきたという点である。

北宋から南宋中期頃までの傾向としては、先賢祠の選択が主に外来の地方官によってなされていた、という点も重要である。地方官にとって赴任地において教化を行うことは、一官僚としても、一士大夫としても当然果たすべき役割の一つであった。建学、修学事業のほかに、その地の範とすべき人物を見出して学校に祀るということは、ある一定の儒教的価値観の範囲内ではあるものの、地方官が各地域の伝統を重視したからだったと言える。しかしこれは見方を変えれば、一定の儒教的価値観に基づくその地の文化伝統が、外来の地方官によって提示され、それが学校の中に表現されたと考えることもできる。それは基本的に地域士人層に受容されたから、外からの押し付けと見ることはできないが、外から与えられた枠組みであったとは言えるだろう。

このような地域伝統の発掘の一方、南宋中期に朱子学が広がりを見せるようになると、周敦頤や二程、朱熹を始めとする道統の先儒たちが広く祀られるようになる。これは祀る側が、地域にかかわらず道学を信奉するものと自らを位置づけ、それを表明する意味を

含んでいた。これに対する魏了翁の異論を位置づけるならば、学校に祀る先賢祀は、地域士人層が自らを地域に立脚した存在であると認識し、そのアイデンティティを託すことのできる存在でなければならない、としたことにその特徴を見出すことができる。南宋後半期には、地方官だけでなく、地域士人層も先賢祀の選定に関与している例が史料上よく見られるようになってくる。祀られる対象の子孫にとっては直接的な利益に関わることも大きな理由の一つであるが、すでに確立した地域伝統の枠組みをもとにしながらも、地域士人層が自らの地域伝統を主体的に選択し、意識するようになったことがその背景にあり、魏了翁の議論はこの流れにそったものだったと言える。

これらを踏まえて学校の地域社会で果たした役割や、本来期待されていた機能を考えると、必ずしも学問を行い、科挙合格を目指すためだけの場ではなかったことが理解できる。学校政策は多分に理想的で、古の理想的な社会を実現するために欠かせないものと位置づけられていたが、郷挙里選にもとづく科挙の理念とも合わせ考えれば、推薦の基盤となる地域社会に士人コミュニティを形成する場を作ること、それが学校に期待された役割だったと考えられる。儀礼や祭祀はその意味から言っても、学校にとって欠くことのできない重要なものだったのである。特に士人層が急拡大していく北宋の後半期から南宋にかけては、急増する士人層を抱え込む場として学校は最も適していたし、王朝も一貫してそれを理想的なこととして支持していた。すなわち学校が地域社会に受容されて定着していく過程、地域コミュニティの場として成熟していく過程こそが宋代の学校の歴史であり、学校内で行われた儀礼・祭祀は、その中の重要な位置を占めていた、というのが本論文の結論となる。

またこれらの過程を通じて学校は地域アイデンティティを蓄積し、涵養する場へと変容していったことも明らかになった。宋代には支配領域全土から膨大な官僚層が中央に集められ、また学校制度を含む地方における礼制も一層整備されて、儒教理念をもとにした画一化、統一化が積極的に進められた。しかし、だからこそ統一された価値基準にそって各地域を比較することが可能になり、地域的帰属意識と対抗意識が生じやすい環境へと変化していったのである。文化水準の差が感じられやすい環境が整えられたことにより、士人にとっては自らの属する地域をこの基準の上にどのように位置づけ、認識するかというのが重要な問題として意識されるようになった。すなわち地域伝統が創造され、それを受容、継承した上でさらに宣伝していくというのは、統一性が高まる局面において顕在化する差異化、序列化の問題だったと言い換えることもでき、地域間の競争意識が自然と湧き起こってくる条件が用意され、それによって発生した現象だと見るのが可能であろう。

本論文の検討は南宋期までであり、形成された士人社会が元から明にかけてどのように継承され、あるいは変容するのかは、また別の大きな問題として依然存在する。さらにこの時期、北方社会が南方とは大きく異なる形成過程をたどったと考えるならば、明代にかけてどのような統合がなされていくのかは重要な問題となるだろう。本論文では地域コミ

ユニティを形成する場であり、また地域伝統を蓄積して士人のアイデンティティを涵養する場へと成熟していったという、宋代学校の特質を示すことができたと考えるが、元、明代まで射程に含めた社会との関わりについては、今後の課題とすべき問題である。

参考文献一覧

〔和文〕

- 青木敦『宋代民事法の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）
- 青山定雄「宋代における四川官僚の系譜について」（『和田博士古稀記念東洋史論叢』、講談社、1961年）
- 青山定雄「宋代における華北官僚の系譜について（Ⅰ）」（『聖心女子大学論叢』21、1963年）
- 青山定雄「宋代における華北官僚の系譜について（Ⅱ）」（『聖心女子大学論叢』21、1965年）
- 青山定雄「宋代における華北官僚の系譜について（Ⅲ）」（『中央大学文学部紀要（史学科）』12、1967年）、
- 青山定雄「宋代における江西出身の高官の婚姻関係」（『聖心女子大学論叢』29、1967年）
- 吾妻重二『朱子学の新研究』（創文社、2004年）
- 吾妻重二『宋代思想の研究』（関西大学出版部、2009年）
- 荒木敏一『宋代科举制度研究』（東洋史研究会、1969年）
- 飯山知保『金元時代の華北社会と科举制度—もう一つの「士人層」』（早稲田大学出版部、2011年）
- 市來津由彦『朱熹門人集団形成の研究』（創文社、2002年）
- 伊藤正彦「中国史研究の『地域社会論』——方法的特質と意義」（『歴史評論』582、1998年）
- 伊藤正彦『宋元郷村社会史論——明初里甲制体制の形成過程』（汲古書院、2010年）
- 伊原弘「宋代明州における官戸の婚姻関係」（『中央大学大学院研究年報』創刊号、1972年）
- 伊原弘「宋代婺州における官戸の婚姻関係」（『中央大学大学院論究』6巻1号、1974年）
- 伊原弘「南宋四川における定居士人—成都府路・梓州路を中心として」（『東方学』54、1977）
- 伊原弘「中国宋代の都市とエリート——常州の発展とその限界——」（『史潮』新28、1990年）
- 梅原郁『宋代官僚制度研究』（同朋舎、1985年）
- 遠藤隆俊「范氏義荘の諸位・掌管人・文正位について——宋代における宗族結合の特質」（『集刊東洋学』60、1988年）
- 遠藤隆俊「宋末元初の范氏について——江南士人層の一類型」（東北史学会『歴史』74、1990）
- 遠藤隆俊「中国近世宗族論の展開——士大夫研究への一視角」（『集刊東洋学』71、1994年）
- 王瑞来『宋代の皇帝権力と士大夫政治』（汲古書院、2001年）
- 王美華著、梅村尚樹訳「唐宋時期郷飲酒礼変遷の分析」（『史滴』33、2011年）
- 岡元司『宋代沿海地域社会史研究——ネットワークと地域文化』（汲古書院、2012年）
- 小山正明『明清社会経済史研究』（東京大学出版会、1992年）
- 片山共夫「元代の郷先生について」（『モンゴル研究』15、1984年）
- 金井徳幸「南宋における社稷壇と社廟について」（酒井忠夫編『台湾の宗教と中国文化』、風響社、1992年）

- 何炳棣著、寺田隆信・千種真一訳『科举と近世中国社会——立身出世の階梯』（平凡社、1993年）
- 川本芳昭『中華の崩壊と拡大』（講談社、2005年）
- 川本芳昭『東アジア古代における諸民族と国家』（汲古書院、2015年）
- 桑原隲蔵「歴史上より観たる南北支那」（『桑原隲蔵全集』第2巻、岩波書店、1968年）
- 小島毅「宋代天譴論の政治理念」（『東洋文化研究所紀要』107、1988年）
- 小島毅「郊祀制度の変遷」（『東洋文化研究所紀要』108、1989年）
- 小島毅『中国近世における礼の言説』（東京大学出版会、1996年）
- 小林義廣『欧陽脩—その生涯と宗族』（創文社、2000年）
- 小林義廣「内藤湖南の中国近世論と人物論」（内藤湖南研究会編『内藤湖南の世界——アジア再生の思想』、河合文化教育研究所、2001年）
- 小林義廣「南宋晚期吉州の士人における地域社会と宗族——欧陽守道を例にして」（『名古屋大学東洋史研究報告』36、2012年）
- 近藤一成『宋代中国科举社会の研究』（汲古書院、2009年）
- 酒井忠夫『中国善書の研究』（弘文堂、1960年）
- 重田徳『清代社会経済史研究』（岩波書店、1975年）
- 斯波義信『宋代商業史研究』（風間書房、1968年）
- 斯波義信『宋代江南経済史の研究』（東京大学東洋文化研究所、1988年）
- 島田虔次『中国における近代思惟の挫折』（筑摩書房、1949年）
- 島田虔次『朱子学と陽明学』（岩波書店、1967年）
- 須江隆「徐偃王廟考——宋代の祠廟に関する一考察」（『集刊東洋学』69、1993年）
- 須江隆「唐宋期における祠廟の廟額・封号の下賜について」（『中国——社会と文化』9、1994年）
- 須江隆「社神の変容—宋代における土神信仰をめぐって」（東北大学文学会編『文化』58巻1・2号、1994年）
- 須江隆「福建莆田の方氏と祥応廟」（宋代史研究会編『宋代社会のネットワーク』、汲古書院、1998年）
- 須江隆「宋代における祠廟の記録——「方臘の乱」に関する言説を中心に」（東北史学会『歴史』95、2000年）
- 須江隆「熙寧七年の詔——北宋神宗朝期の賜額・賜号」（『東北大学東洋史論集』8、2001年）
- 須江隆「祠廟の記録が語る「地域」観」（宋代史研究会編『宋代人の認識——相互性と日常空間』、汲古書院、2001年）
- 須江隆「唐宋期における社会構造の変質過程——祠廟制の推移を中心として」（『東北大学東洋史論集』9、2003年）
- 須江隆「徽宗時代の再検討——祠廟の記録が語る社会構造」（『人間科学研究』1、2004年）
- G・W・スキナー著、今井清一訳『中国王朝末期の都市』（晃洋書房、1989年）

- G・W・スキナー著、今井清一・中村哲夫・原田良雄訳『中国農村の市場・社会構造』（法律文化社、1979年）
- ハリエット・ズンドファー著、吉田真弓訳「宋代地域社会の概念——一九五〇年以降の欧米における研究と文献分析」（伊原弘・市來津由彦・須江隆編『中国宋代の地域像——比較史からみた専制国家と地域』、岩田書院、2013年）
- 周藤吉之『宋代官僚制と大土地所有』（日本評論社、1950年）
- 宋代史研究会編『宋代の知識人——思想・制度・地域社会』（汲古書院、1993年）
- 宋代史研究会編『宋代の規範と習俗』（汲古書院、1995年）
- 宋代史研究会編『宋代社会のネットワーク』（汲古書院、1998年）
- 宋代史研究会編『宋代人の認識——相互性と日常空間』（汲古書院、2001年）
- 多賀秋五郎『唐代教育史の研究—日本学校教育の源流』（不昧堂書店、1953年）
- 高津孝「東坡の芸術論と場の性格」（宋代史研究会編『宋代社会のネットワーク』、汲古書院、1998年）
- 高橋芳郎『宋—清身分法の研究』（北海道大学図書刊行会、2001年）
- 田中正俊「民変・抗租奴変」（田中正俊『田中正俊歴史論集』、汲古書院、2004年）
- 土田健次郎『道学の形成』（創文社、2003年）
- 寺地遵『南宋初期政治史研究』（溪水社、1988年）
- 寺田剛『宋代教育史概説』（博文社、1960年）
- 友枝龍太郎『朱子の思想形成』（春秋社、1969年）
- 内藤湖南「支那近世史」（『内藤湖南全集』10巻、筑摩書房、1969-1976年）
- 内藤湖南「概括的唐宋時代観」（『歴史と地理』9巻5号、1922年）
- 中島楽章「宋元明移行期論をめぐって」（『中国——社会と文化』20、2005年）
- 中砂明德『中国近世の福建人——士大夫と出版人』（名古屋大学出版会、2012年）
- 濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』（東京大学出版会、1982年）
- 濱島敦俊『総管信仰』（研文出版、2001年）
- 林友春編『近世中国教育史研究—その文教政策と庶民教育』（国土社、1958年）
- 林友春『書院教育史』（学芸図書、1989年）
- 平田茂樹『宋代政治構造研究』（汲古書院、2012年）
- 平田茂樹「近藤一成著『宋代中國科擧社會の研究』（汲古叢書 83）」（『史学雑誌』122編4号、2013年）
- 福井重雅『漢代儒教の史的研究—儒教の官学化をめぐる定説の再検討』（汲古書院、2005年）
- 前田直典「東アジアにおける古代の終末」（『歴史』1巻4号、1948年）
- 松本浩一『宋代の道教と民間信仰』（汲古書院、2006年）
- 宮崎市定『科擧』（秋田書店、1950年）
- 宮崎市定『東洋的近世』（教育タイムス社、1950年）
- 宮崎市定「宋代の士風」（『史学雑誌』62編2号、1953年）

- 宮崎市定「明代蘇松地方の士大夫と民衆」(『史林』37卷2号、1954年)
- 宮崎市定『中国史』下(岩波書店、1978年)
- 森田憲司『元代知識人と地域社会』(汲古書院、2004年)
- 森正夫「日本の明清時代史研究における郷紳論について」1, 2, 3(『歴史評論』308, 312, 314、1975, 1976年)
- 森正夫「明代の郷紳——士大夫と地域社会との関連についての覚書——」(『名古屋大学文学部研究論集』77、史学26、1980年)
- 森正夫「中国前近代における地域社会の視点」(『名古屋大学文学部研究論集』83、1982年)
- 諸橋轍次『儒学の目的と宋儒慶曆至慶元百六十年間の活動』(大修館書店、1929年)
- 山口智哉「宋代「同年小録」考——「書かれたもの」による共同意識の形成——」(『中国——社会と文化』17、2002年)
- 山口智哉「宋代郷飲酒礼考——儀礼空間としてみた人的結合の〈場〉」(広島史学研究会『史学研究』241、2003年)
- 山口智哉「宋代先賢祠考」(『大阪市立大学東洋史論叢』15、2006年)

[中文]

- 包偉民「精英們‘地方化’了嗎？——試論韓明士政“治家与紳士”与‘地方史’研究方法」(『唐研究』11、2005年)
- 陳東原『中国古代教育』(商務印書館、1934年)
- 陳雯怡『由官学到書院——從制度与理念的互動看宋代教育的演变』(聯經出版、2004年)
- 方誠峰「統会之地——県学与宋末元初嘉定地方社会的秩序」(『新史学』16卷3号、2005年)
- 高令印・陳其芳『福建朱子学』(福建人民出版社、1986年)
- 高明士『唐代東亜教育圈的形成』(国立編訳館、1984年)
- 高明士『中国中古的教育与学礼』(台大出版中心、2005年)
- 龔延明『宋代官制辞典』(中華書局、1997年)
- 郭齐家『中国教育思想史』(教育科学出版社、1987年)
- 郭齐家・苗春徳・吳玉琦主編『中国教育思想通史』第三卷(宋元)(湖南教育出版社、1994年)
- 何俊『南宋儒学建構』(上海人民出版社、2004年)
- 胡昭曦「詩書持家，理学名門——宋代蒲江魏氏家族研究」(鄒重華・粟品孝主編『宋代四川家族与學術論集』、四川大学出版社、2005年)
- 黄進興『優入聖域——權力・信仰与正統性(修訂版)』(中華書局、2010年)
- 黄寬重『宋代的家族与社会』(国家図書館出版社、2009年)
- 雷聞『郊廟之外——隋唐国家祭祀与宗教』(生活・読書・新知三聯書店、2009年)
- 李弘祺『宋代官学教育与科举』(聯經出版、1993年)
- 李之亮『宋代路分長官通考』(巴蜀書社、2003年)

- 劉海峰『唐代教育与選舉制度綜論』(文津出版社、1991年)
- 毛礼銳等編『中国古代教育史』(教育出版社、1981年)
- 苗春德主編『宋代教育』(河南大学出版社、1992年)
- 苗春德·趙国權『南宋教育史』(上海古籍出版社、2008年)
- 彭東煥編『魏了翁年譜』(四川人民出版社、2003年)
- 任時先『中国教育思想史』(商務印書館、1937年)
- 宋大川『唐代教育体制研究』(山西教育出版社、1998年)
- 田甜·聶有超「20世紀以来宋代地方官学研究綜述」(『和田師範專科學校學報』第29卷第2期、2010年)
- 魏峰『宋代遷徙家族研究』(上海古籍出版社、2009年)
- 吳松弟『北方移民与南宋社会变遷』(文津出版社、1993年)
- 袁征『宋代教育』(廣東高等教育出版社、1991年)
- 鄭丞良『南宋明州先賢祠研究』(上海古籍出版社、2013年)
- 鄒重華「“鄉先生”——一個被忽略的宋代私学教育角色」(鄒重華·粟品孝主編『宋代四川家族与學術論集』、四川大学出版社、2005年)
- 鄒重華「士人學術交遊圈：一個學術史研究的另類視角(以宋代四川為例)」(鄒重華·粟品孝主編『宋代四川家族与學術論集』、四川大学出版社、2005年)
- 周愚文『宋代的州縣学』(國立編譯館、1996年)
- 周愚文「宋代的学礼」(高明士編『東亞傳統教育与学礼学規』、国立台湾大学出版中心、2005年)

[英文]

- Bol, Peter K., *This Culture of Ours: Intellectual Transitions in Tang and Sung China*, Stanford, 1992.
- Bol, Peter K., *Neo-Confucianism in History*, Cambridge, Mass. and London, 2008.
- Chaffee, John W., *The Thorny Gates of Learning in Sung China*, Cambridge, 1985.
- Chen, Song, “Managing the Territories from Afar: The Imperial State and Elites in Sichuan, 755-1279,” Ph.D. dissertation, Harvard University, 2011.
- De Weerd, Hilde, *Competition over Content: Negotiating Standards for the Civil Service Examinations in Imperial China (1127-1279)*, Cambridge, Mass., 2007.
- Elman, Benjamin A., *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China*, Berkeley, 2000.
- Elvin, Mark, *The Pattern of the Chinese Past*, Stanford, 1973.
- Gerritsen, Anne, *Ji'an Literati and the Local in Song-Yuan-Ming China*, Leiden, 2007.
- Hansen, Valerie, *Changing Gods in Medieval China, 1127-1276*, Princeton, 1990.
- Hartwell, Robert, “Demographic, Political, and Social Transformations of China,

- 750-1550”, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 42(1982).
- Ho, Ping-ti, *The Ladder of Success in Imperial China: Aspects of Social Mobility, 1368-1911*, New York, 1962.
- Hymes, Robert P., *Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-chou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung*, Cambridge, 1986.
- Hymes, Robert P. and Conrad Schiorkauer eds., *Ordering the World: Approaches to State and Society in Sung Dynasty China*, Berkley, 1993.
- Lee, Sukhee, *Negotiated Power: The State, Elites, and Local Governance in Twelfth-to Fourteenth-Century China*, Cambridge, Mass., 2014.
- Lee, Thomas H. C., *Government Education and Examinations in Sung China*, Hong Kong, 1985.
- Liu, James T. C., *China Turning Inward: Intellectual-Political Changes in the Early Twelfth Century*, Cambridge, Mass., 1988.
- Neskar, Ellen, “The Cult of Worthies: A Study of Shrines Honoring Local Confucian Worthies in the Sung Dynasty (960-1279),” Ph.D. dissertation, Columbia University, 1993.
- Skinner, G. William, “Marketing and Social Structure in Rural China,” *Journal of Asian Studies*, vol.24, no.1,2,3(1964).
- Skinner, G. William ed., *The City in Late Imperial China*, Stanford, 1977.
- Skinner, G. William, “The Structure of Chinese History,” *Journal of Asian Studies*, vol.44, no.2 (1985).
- Smith, Paul Jakob, and Richard von Glahn eds., *Song-Ming-Yuan Transition in Chinese History*, Cambridge, Mass., 2003.
- Walton, Linda, *Academies and Society in Southern Sung China*, Honolulu, 1999.

論文の内容の要旨

論文題目 宋代学校研究
——地域社会における儀礼・祭祀空間としての視点から——
氏名 梅村尚樹

本論文は中国宋代（960～1279）における学校、おもに地方における官学を対象とする研究であるが、これを教育史の文脈から理解するのではなく、地域における儀礼・祭祀の行われた空間として理解し、士人層や地域社会との関わりを論ずるものである。前近代中国における学校の歴史を振り返れば、宋代は地方学校が急速に普及し、官立学校である官学と私立学校である書院のどちらもが大いに発展を遂げた時期に相当する。

宋代におけるこの普及は、強く政策的に推し進められたもので、同時期に進められた科挙制度の確立と密接に関わっていた。北宋中期から北宋末にかけて断続的に科挙との融合が図られ、北宋末には科挙を廃止して仕官経路を学校経由に一本化することが目指されたが、結果としてこの過激な改革は頓挫してしまう。その後南宋時期には、学校と科挙制度の結び付きは弱まるものの、それにもかかわらず官学は北宋期以上に普及を続けていくのである。

このような事実を反映して従来の宋代学校研究は、教育史として語られるか、さもなければ科挙史の中に位置づけられることがほとんどであった。これらはどちらも学校を教育機関と捉え、学校で何を学習し、試験を通じて社会とどのような関わりがあったかに注目したものと言える。

しかしながら中国前近代の学校は単なる教育機関にとどまらない面も存在した。そもそも学校は経書に典拠を持ち、その世界観をもとに設計されたものである。また唐代以降、学校は孔子廟と並置されるのが一般的で、廟と学の分かち難い関係が構築されていたが、この「廟学制度」は清代まで一貫して存在したのである。そうであれば宋代のような急速に学校が普及した時期にあつて、儒教における礼教施設としての面がどのような意味を持ち、どのような変化を伴ったのかは重要な問題のはずであるが、これは従来ほとんど顧みられてこなかった。

このような観点から宋代の学校を見直すと、当初全国的に展開していく学校は、一様に孔子とその弟子のみを祀っていたが、時代とともに徐々に多様な対象を祀る空間へと変化していったことが浮かび上がってきた。しかもそれは地域社会に受容されていく過程とともに、地域固有の対象を祀る傾向が強くなっていくのである。

以上を踏まえて本論文は、学校内に祀られる祭祀対象（先賢祠）と、その祭祀を正当化した理論構築に注目し、士人層や地域社会との関わりのほか、王安石系の学問から朱子学へと主流が移っていく思想史上の位置づけを意識しつつ、儀礼・祭祀空間としての宋代地

方学校がどのように変容していったのか、その変遷を論じたものである。

第一章では北宋前半期に焦点を当て、主に孔子廟が学校へと切り替わっていく様子を、実際に行われた修建事業の分布をもとに連続的に描き、以下のことを明らかにした。唐末五代の戦乱を経て宋初には地方学校はほぼ途絶していたため、宋王朝は地方における孔子廟の再建から礼教施設の普及に着手したが、特に三代真宗朝の頃には、中央の国学に置かれたものと同様の形式を持つ孔子廟を地方に展開しようとし、また積奠時には国学と同様に孔子廟で講学を行うよう奨励した。しかし四代仁宗朝の頃から、理念的に積奠は孔子廟ではなく学校で行う儀礼として改めて定義されるようになり、また孔子廟は学校に包摂されるべきものと認識が変化していった。重要なのは、この時期までの地方学校は孔子廟との区別が曖昧な上、中央の国学をモデルに作っているため、学校内に孔子とその弟子たちが祀られるに過ぎなかった点で、つまり設備のみならず儀礼・祭祀の面で、中央と地方で相似する体系の構築が目指されたと言える。

第二章から第五章までは、このように画一的に作られた地方学校が、祭祀の面において地方独自の要素を内包していく様子を描いた。第二章では、学校内に祀られた先賢祠としては初期のものに相当する文翁の事例に注目して論じた。漢代の文翁は成都で学校を作ったことで有名であり、北宋期に興学の機運が高まると再評価されたが、当初文翁に関する語られ方は地方性を含むものではなかった。ところが実際に興学が進められる中、文翁は成都府学に祀られ、さらにそれに関わる言説が成都の士人たちに再生産されることによって、成都府学の象徴的存在となっていった。これは地域に学校が受容され定着していく過程と軌を一にしており、文翁の顕彰を通じて学校内に地域の歴史と伝統が創造され、可視化された事例と言える。さらに福建における常袞祠の事例などを通じて、各地に文翁言説に対抗する動きがあったことを示し、総じて北宋中期から南宋初期にかけて、学校内の先賢祭祀が地域性を帯びてくる様子を明らかにした。

第三章では地方官の着任儀礼と学校との関わりを論じた。地方官は着任した際に当地の代表的な祠廟に拝謁する慣習があったが、その際に書き残す祝文について、現存する宋代に書かれたものを網羅的に収集し、着任儀礼の全体像をほぼ明らかにした。その結果、北宋の後半から南宋の初期にかけて、孔子廟が他の諸廟よりも重視すべき卓越した存在と認識されるようになっていき、謁廟儀礼が徐々に定着し制度化されたことが明らかになった。さらに南宋中期以降の傾向では、着任儀礼の対象として地域固有の先賢が多く含まれるようになってくること、着任儀礼には地方官が対象の施設を視察し、継続的に維持管理を行う目的が含まれていたことも明らかになった。孔子廟への拝謁は実質的に学校に赴くことであるから、これは学校の適切な維持管理にもつながったし、また地方官は着任時に学校の先賢祠を通じてその土地の歴史と伝統に接し、これを尊重したのである。

第四章は、なぜ宋代になって学校の中に先賢を祀るようになったのかという観点から、そもそも学校に先賢を祀ることが当時どのように正当化されたのかを論じた。南宋中期に興った朱子学は、先賢として祀るにふさわしい条件とは何かを初めて具体的に議論したも

のと言える。朱子学は様々な祭祀・儀礼に関して、礼学上の根拠を厳しく問い直すことで儀礼体系全体の理論を構築しようとしたが、その流れの中で先賢祠も経書にもとづいて理解することが試みられたのである。そこでまず北宋末に新たに示された学校、および先賢祭祀に関する経学上の理解を唐代との比較から整理した上で、南宋中期以降の転換を位置づけた。特に朱子学の系譜に連なる魏了翁は、当時全国に急速に広がりつつあった周敦頤祠に疑問を抱き、経書や史書を博搜してこれを批判する理論を構築した。先賢はその土地ゆかりの人物を祀るのが礼に適った正しいあり方であり、理由なく全国で通祀してはならないというのがその結論であった。この背景には、各地域固有の先賢祠と全国で通祀される先賢祠の両方がともに急増していたという事情があり、これら一連の議論は多様化する先賢祠について礼学的根拠を与えていくものでもあった。明代には先賢は「郷賢」や「名宦」などに截然と区分されるようになるが、この概念分化はこのような過程により起こったということも明らかになった。

第五章では南宋後半期、魏了翁以降の時期を対象として、最終的に学校が多様な先賢祠を包摂するようになった転換点と、その理由を明らかにした。魏了翁は先賢祭祀の理論をさらに進め、特に先賢の子孫がそれを行う場合、すなわち祖先祭祀と重なり合った時に最も古礼に適う理想的なやり方になると論じた。このような考え方は当時の士人層の要請とも合致していたのである。先賢の祭祀を絶やさないためにはその子孫を保護し、経済的な支援を与える必要があると考えられるようになり、これによって子孫が自らの祖先を先賢として祀るよう要望することも現れてくる。この際に永く子孫を保護し先賢祭祀を維持する方策として、学外から学内に先賢祠を移すことが行われたのである。すなわち学校は単に過去にその土地と関わった先賢を顕彰するというだけでなく、その土地に住み続ける子孫にとっては一族を公的に保護する場としても機能したことが明らかになった。

以上の検証と考察を経て、本論文で明らかになったことをまとめれば以下のようなになる。宋代の学校は単なる教育機関にはとどまらず、地域社会における士人コミュニティを形成する重要な場であり、その中で儀礼・祭祀空間としての役割が大きな意味を持ったのである。当初中央の国学と相似をなす儀礼・祭祀施設として構想された地方官学は、徐々に地域にゆかりのある人物が祀られるようになっていき、一定の儒教的な価値観にもとづくものとは言え、地域固有の歴史と伝統がそこに創造され可視化されていき、また地域士人層によって再生産されていった。すなわち学校は地域の歴史と伝統を蓄積する場として北宋から南宋へと、宋代をかけて徐々に成熟していき、士人層にとって地域観や地域的帰属意識を涵養する場となっていったと言える。

またこれらの検討から、宋代という時代は、儒教的価値にもとづきながら価値観の統一が進められた時期とみなすことができ、それゆえに地域意識の先鋭化や地域的競争心の表面化が起こったのだと考えられる。宋代が地域意識の形成期に当たるとすれば、この成果は続く元・明の社会に対する理解を深めることにもつながるであろう。